

談話の型および長さとの聴解活動の係に 関する一考察

—日本語能力試験の分析結果を利用して—

水 上 由 美

1. はじめに

外国語の発話能力を測定するための試験に、ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages: 米国外国語教育協会) によって開発された OPI (Oral Proficiency Interview) がある。この OPI のガイドラインには、日本語学習者の発話における熟達度を測る基準の一つとして、文レベルでの発話か、段落レベルでの発話かという談話の型という観点からの記述がある。これを聴解で考えるならば、文レベルの聴解というのは、話者と聞き手が主に文単位でやりとりをする会話形式の聴解にあたるだろう。そして段落レベルの聴解というのは、一人の話者がある程度のまとまりのある内容を語る一人語り形式の聴解にあたるだろう。

現在行なわれている大規模な日本語の試験として日本語能力試験があるが、この試験結果を分析した報告書には、困難度と識別力という指標が数値化され公表されている。筆者は当初、これら日本語能力試験における困難度、識別力を、上述した会話形式の聴解か、一人語り形式の聴解かといった談話の型という観点から分類し、日本語学習者の聴解について考えてみようと思い、調査を進めていた。しかし調査の途中で、談話の型における会話形式の聴解の場合、2ターン¹⁾から14ターンまでと談話の長さにも幅があり、これらを一律に会話形式の聴解とするよりは、談話の長さという観点からも、幾つかに分類した方がいいのではないかと考えた。このような過程の中、談話の型による分類に加え、談話の長さをどのように分類するかについて紆余曲折を経た後、本稿では、聴解試験の際に聴く問題文を、談話の型と談話の長さという観点から、2～5ターンの会話形式の場合、6～7ターンの会話形式の場合、8ターン以上の会話形式の場合、一人語り形式の場合の4つに分類し、日本語学習者の聴解につい

(2)

て考えることにした。

談話の長さによる分類についての詳細は、「3. 3. 分類方法」にて述べることにし、ここでは、本稿の概要と結果を述べる。本稿では、談話の型および長さによって、日本語学習者の聴解活動にどのような違いが現れるのかを調べるために、聴解試験の際に聴く問題文を、談話の型と談話の長さという観点から、「2～5ターン」、「6～7ターン」、「8ターン以上」、「一人語り」の4つに分類し、これらの分類によって、日本語能力試験の報告書にある困難度、識別力に違いが現れるのか否かを統計手法を用いて調査した。その結果、困難度には有意な差は認められなかったが、識別力には有意な差が認められた。また、この差は8ターン以上の会話形式の場合と一人語り形式の場合との間に認められ、これらの談話の型による違いにおいて、日本語学習者の聴解活動に何らかの差があるということがわかった。

日本語能力試験は多くの分析結果を踏まえ、改良が重ねられてきた最も大規模な試験であるが、識別力において、「8ターン以上」と「一人語り」の間には有意な差が認められた。このような結果は、聴解能力を伸ばす教室活動を行なう際のポイントとして、何らかの形で今後に生かせるのではないだろうか。

以下、2節で先行研究を概観し、3節で調査について述べ、4節でまとめた。

2. 先行研究

聴解に関する研究は多くあるが、ここでは大きく二つの観点から概観したい。一つは、聴解問題を作成する側の視点に立った研究であり、もう一つは、聴解問題を解答する側の視点に立った研究である。

まず、聴解問題を作成する側の視点に立った研究として次のようなものがある。島田（2003）では、聴解問題の解答の方法に着目している。選択肢文字提示形式と選択肢音声提示形式とでは、識別力に関しては統計的有意差は認められなかったが、正答率に関しては有意差が認められ、文字提示形式の方が音声提示形式よりも正答率が高かったとされている。さらに、島田（2006）では、どのような特徴を持つ聴解の問題文が、選択肢提示形式の違いに影響を受けるのかを論じている。また、宮城（2006）では、日本語能力試験1級聴解問題を使って、正答率の低い問題について個々に質的な分析を行ない、より良い聴解問題について論じている。

一方、聴解問題を解答する側の視点に立った研究には次のようなものがある。

山本（1994）では、「上級聴解の下位知識は、音声、文法、和語、専門的背景、漢語の知識の順に階層構造化されているのではないか」（p.34）とされている。阿久津（1998）では、聴解問題の解答法を探ることを目的として、平成3～8年度の日本語能力試験1級の聴解問題（全166問）の本文を分析し、談話型を抽出している。三國・小森・近藤（2005）では、聴解における語彙知識の役割を内容理解に必要な語彙知識の量的側面（既知語率）から検討している。結果は、読解における既知語率が約95～96%（小森・三國・近藤（2004））に対して、聴解における既知語率が約93%であり、聴解は読解に比べて、低い既知語率で内容理解が促進されるとしている。

以上のように、聴解に影響を与え得る要因について、様々な観点から論じられてきた。しかし、談話の型や談話の長さという観点から、聴解について論じている研究は管見の限りでは見られなかった。

3. 調査

以下、3. 1. で調査資料について述べ、3. 2. で調査方法について、3. 3. で分類方法について述べる。続いて、3. 4. で調査手順を述べ、3. 5. で聴解問題の型による困難度の差についての調査結果を示し、3. 6. で聴解問題の型による識別力の差についての調査結果を示す。

3. 1. 調査資料

現在行なわれている大規模な試験に日本語能力試験があることは上述したが、この日本語能力試験の実施後に、統計的な分析結果と評価をまとめた報告書が公表されている。この報告書では、日本語能力試験の各問題項目についての結果が詳細に分析され、まとめられている。

本稿では、平成12年度から平成16年度の『日本語能力試験分析評価に関する報告書』の中の聴解試験部分を調査資料とした。

3. 2. 調査方法

まず、調査対象は、平成12年度から平成16年度の日本語能力試験1級から4級で出題された全聴解問題545問とした。内訳は、1級164問、2級151問、3級131問、4級99問である。

本稿は、日本語学習者の聴解において、談話の型および長さによる違いがど

(4)

のように現れるかを調べるために、聴解試験の際に聴く問題文を、談話の型と談話の長さによって4つに分類し、これらの分類によって、上記資料にある困難度、識別力に違いが現れるのか否かを統計手法を用いて調査した。

上記調査資料において、困難度は「テストの受験者集団にとって各問題項目がどの程度難しかったか、すなわち、受験者がその問題項目にどの程度正答できたかという難易度を示す」(平成15年度 p. 11参照) 数値だとされている。そして、困難度の目安は「およそ0.3から0.7程度の範囲に入る項目が良い項目だといわれている」(同上) とされている。また、識別力は「受験者間の能力の違いを、その項目がどの程度明らかにできるかを示す」(平成15年度 p. 12参照) 数値だとされている。また、一般のテストでは識別力が0.30を下回るとその問題は不適切であり、受験者の能力の差を表していないと判断されるようである。

これらの困難度、識別力であるが、上記調査資料では、日本語能力試験の国内受験者について、国外受験者について、国内と国外の全受験者全体についての数値がそれぞれ報告されている。本稿は日本語学習者の聴解についての調査なので、国内と国外の全受験者全体についての数値を使用することにした。

談話の型、談話の長さによる分類方法については、次の「3. 3. 分類方法」にて述べたい。

3. 3. 分類方法

本稿では、聴解試験の際に聴く問題文を、談話の型と談話の長さという観点から、2～5ターンの会話形式の場合、6～7ターンの会話形式の場合、8ターン以上の会話形式の場合、一人語り形式の場合という4つの場合に分類した。

以下、まず、会話形式の場合と一人語り形式の場合というような談話の型による分類について述べ、次に、2～5ターンの場合、6～7ターンの場合、8ターン以上の場合というような談話の長さによる分類について述べる。

まず、談話の型による分類についてであるが、聴解試験の際に聴く問題文を、談話の型という観点から、複数の話者の発話からなる会話形式の場合と、一人の話者の発話からなる一人語り形式の場合とに分類した。

例えば、以下(1)のような場合が会話形式の場合である。

(1) F 2 : あ、先生だ。

M 1 : 遊んでいないで早くうちに帰って勉強して。

F 2 : はい、分かりました。

(2000年4級問題Ⅱ8番)

一方、以下(2)のような場合が一人語り形式の場合である。

- (2) F：このごろ、若い人が使う言葉って分からないわね。テレビを見ていても、途中で話が分からなくなっちゃうことがあるんですよ。この前なんかね、大学生の孫と一緒にテレビを見ていて「これどんな意味」って聞いたら、なんと孫もはっきりは分かってなかったんですよ。私よりは、ましなのかもしれませんけどね。

(2003年1級問題Ⅱ16番)

次に、談話の長さによる分類についてであるが、「1. はじめに」にて述べたが、今回の調査において、聴解試験の際に聴く問題文が会話形式の場合、2ターンから14ターンまでと談話の長さには幅があった。そこで、談話の長さという観点からも、幾つかに分類することにした。

まず、以下の表1をご覧ください。

表1. 談話の長さによる分類に関する試行過程

談話の型と談話の長さによる分類	分散分析による有意差の有無	
	困難度	識別力
2～3ターン、4～5ターン、6ターン以上、一人語り	無	無
2～4ターン、5ターン、6ターン以上、一人語り	無	無
2～4ターン、5～6ターン、7ターン以上、一人語り	無	無
2～5ターン、6ターン、7ターン以上、一人語り	無	無
2～5ターン、6～7ターン、8ターン以上、一人語り	無	有
2～5ターン、6～8ターン、9ターン以上、一人語り	無	無

これは、談話の長さをどのように分類すべきかということを試行した過程の一部を示したものである。日本語の聴解において、談話の長さをどのように分類すべきかということについて、理論的な説明が見つからなかったため、原始的ではあるが、聴解試験の際に聴く問題文のうち会話形式の場合において、談話の長さから上記表1に示したような組み合わせをたくさん考え、それらの組み合わせからなる分類によって、困難度や識別力に差があるか否かについて1つずつ分散分析を試みた。このような手作業の末に行きついた組み合わせが、「2～5ターン」、「6～7ターン」、「8ターン以上」、「一人語り」という分類である。

つまり、本稿での「2～5ターン」、「6～7ターン」、「8ターン以上」、「一人語り」という分類は、何らかの理論に基づいて決めたものではなく、今回試

(6)

行した中では唯一の組み合わせからなる分類ということである。

具体的な分類方法としては、例えば、以下(3)のような場合は5ターンと数え、「2～5ターン」に分類した。

(3) F：すみません。

M：どれですか。

F：一番下の、右から2番目のです。

M：はい、右から2番目ですね。

F：ええ。

(2004年4級問題I 1番)

以下(4)のような場合は6ターンと数え、「6～7ターン」に分類した。

(4) F 2：斉藤さん、この封筒の中にある物、何だと思う？

M 1：何かな。そんなに大きくないね。

F 2：写真を撮るときに使う物よ。

M 1：カメラか。ずいぶん小さいね。

F 2：そうじゃなくて……。

M 1：あっ、そうか。

(2001年3級問題I 14番)

以下(5)のような場合は10ターンと数え、「8ターン以上」に分類した。

(5) M：これ、お願いします。

F：はい。……ええと、山本さんですね。

M：ええ。

F：山本さん、前に借りた本、もう返しましたか。

M：あ、そうそう。はい、これ。

F：この本、本当は先月返さなければならなかったんですよね。

M：すみません。忙しくて。

F：あの、2週間以上遅れると、次の本がしばらく借りられないんです。

M：今日は駄目なんですか。

F：ええ。山本さんは3週間遅れたので、これから1ヶ月は本が借りられないことになります。

(2002年2級問題II 15番)

3. 4. 調査手順

上述のとおり、本稿では、聴解試験の際に聴く問題文を談話の型と談話の長さという観点から、「2～5ターン」、「6～7ターン」、「8ターン以上」、「一人語り」という4つの場合に分類することにしたが、以下、この分類のことを聴解問題の型の分類と呼びたい。

それではまず、調査対象とした聴解問題545問の各級における聴解問題の型

ごとの問題数がどのようにになっているのかを示した以下の表2をご覧ください。

表2. 各級における聴解問題の型ごとの問題数

545	2～5ターン	6～7ターン	8ターン以上	一人語り
1級 164 (100%)	38 (24%)	35 (21%)	35 (21%)	56 (34%)
2級 151 (100%)	45 (29%)	38 (25%)	34 (23%)	34 (23%)
3級 131 (100%)	51 (39%)	32 (24%)	17 (13%)	31 (24%)
4級 99 (100%)	56 (57%)	17 (17%)	5 (5%)	21 (21%)

1級は、「2～5ターン」の問題数が38問、「6～7ターン」の問題数が35問、「8ターン以上」の問題数が35問、「一人語り」の問題数が56問あり、全164問であった。2級は、それぞれ45問、38問、34問、34問あり、全151問であった。3級は、それぞれ51問、32問、17問、31問あり、全131問であった。4級は、それぞれ56問、17問、5問、21問あり、全99問であった。

表2に示した、1級から4級の各級と、「2～5ターン」、「6～7ターン」、「8ターン以上」、「一人語り」という聴解問題の型ごとの問題数との関係は、カイ2乗検定（独立性の検定）により、1%水準で独立ではない ($\chi^2_{(9)} = 43.92$, $p < .01$) という結果であった。

以下、表1にて有意な差が出なかったが念のため、聴解問題の型と困難度との関係を見るために、1級から4級の各級における聴解問題の型ごとに困難度の平均値を算出し、分散分析による比較を行なう。

次に、聴解問題の型と識別力との関係を見るために、1級から4級の各級における聴解問題の型ごとに識別力の平均値を算出し、分散分析による比較を行なう。

続いて、以上2つの分散分析の結果を受け、有意な差が認められた後者、聴解問題の型による識別力の差に関する多重比較を行なう。

3. 5. 聴解問題の型による困難度の差についての調査結果

ここでは、表1にて有意な差が出なかったが念のため、聴解問題の型による困難度の差についての調査結果を示す。

(8)

聴解問題の型と困難度との関係を見るために、1級から4級の各級における聴解問題の型ごとに困難度の平均値を算出し、表にしたのが以下の表3である。

表3. 各級における聴解問題の型ごとの困難度平均値

	2～5ターン	6～7ターン	8ターン以上	一人語り
1級	0.647	0.636	0.691	0.638
2級	0.533	0.561	0.547	0.501
3級	0.482	0.480	0.504	0.473
4級	0.499	0.518	0.462	0.473

1級の聴解問題の中で、「2～5ターン」に分類された38問における困難度の平均値は0.647、「6～7ターン」に分類された35問における困難度の平均値は0.636、「8ターン以上」に分類された35問における困難度の平均値は0.691、「一人語り」に分類された56問における困難度の平均値は0.638であった。2級では、それぞれ0.533、0.561、0.547、0.501であった。3級では、それぞれ0.482、0.480、0.504、0.473であった。4級では、それぞれ0.499、0.518、0.462、0.473であった。

これらの数値を分散分析により比較した結果、以下(6)のとおり、有意な差は認められなかった。

(6) 結果：F(3, 12) = 0.11 < 棄却の臨界値：F0.05, 3, 12 = 3.49

3. 6. 聴解問題の型による識別力の差についての調査結果

ここでは、聴解問題の型による識別力に差があるか否かについての調査結果と、その結果を受け行なった多重比較の結果を示す。

まず、聴解問題の型と識別力との関係を見るために、1級から4級の各級における聴解問題の型ごとに識別力の平均値を算出した。それらを表にしたのが以下の表4である。

表4. 各級における聴解問題の型ごとの識別力平均値

	2～5ターン	6～7ターン	8ターン以上	一人語り
1級	0.423	0.420	0.428	0.398
2級	0.406	0.408	0.405	0.380
3級	0.403	0.420	0.436	0.378
4級	0.414	0.442	0.460	0.421

1級の聴解問題の中で、「2～5ターン」に分類された38問における識別力の平均値は0.423、「6～7ターン」に分類された35問における識別力の平均値は0.420、「8ターン以上」に分類された35問における識別力の平均値は0.428、「一人語り」に分類された56問における識別力の平均値は0.398であった。2級では、それぞれ0.406、0.408、0.405、0.380であった。3級では、それぞれ0.403、0.420、0.436、0.378であった。4級では、それぞれ0.414、0.442、0.460、0.421であった。

これらの数値を分散分析により比較した結果、以下(7)のとおり、5%水準で有意な差が認められた。

(7) 結果： $F(3, 12) = 3.55 > \text{棄却の臨界値} : F_{0.05, 3, 12} = 3.49$

続いて、有意な差が認められた上記の結果を受け、聴解問題の型による識別力の差が、「2～5ターン」、「6～7ターン」、「8ターン以上」、「一人語り」の中のどことどの間にあるのかを多重比較により調べた。本稿では、テューキーのHSD法を使用した。以下の表5は、各聴解問題の型の間における識別力の差を示したものである。

表5. 聴解問題の型の間における識別力の差

	2～5ターン	6～7ターン	8ターン以上	一人語り
2～5ターン		0.011	0.021	0.017
6～7ターン			0.010	0.028
8ターン以上				0.038
一人語り				

「2～5ターン」と「6～7ターン」の間の差は0.011、「2～5ターン」と「8ターン以上」の間の差は0.021、「2～5ターン」と「一人語り」の間の差は0.017であった。そして、「6～7ターン」と「8ターン以上」の間の差は0.010、「6～7ターン」と「一人語り」の間の差は0.028であった。さらに、「8ターン以上」と「一人語り」の間の差は0.038であった。

また、算出されたHSDは0.035であり、上記表5の各聴解問題の型の間における識別力の差とを比較すると、以下(8)のとおり、聴解問題の型が「8ターン以上」と「一人語り」の間に、有意な差が認められた。

(8) 「8ターン以上」と「一人語り」の間の差 $=0.038 > \text{HSD} = 0.035$

一方、その他の場合は、以下(9)のとおり、有意な差は認められなかった。

(9) 「2～5ターン」と「6～7ターン」の間の差 $=0.011 < \text{HSD} = 0.035$

「2～5ターン」と「8ターン以上」の間の差=0.021<HSD=0.035

「2～5ターン」と「一人語り」の間の差=0.017<HSD=0.035

「6～7ターン」と「8ターン以上」の間の差=0.010<HSD=0.035

「6～7ターン」と「一人語り」の間の差=0.028<HSD=0.035

4. まとめ

本稿では、日本語学習者の聴解において、談話の型および長さによる違いがどのように現れるかを調べるために、聴解試験の際に聴く問題文を談話の型と談話の長さという観点から、「2～5ターン」、「6～7ターン」、「8ターン以上」、「一人語り」という4つに分類し、日本語能力試験の報告書にある困難度、識別力それぞれとの関係を調査した。

その結果、「2～5ターン」、「6～7ターン」、「8ターン以上」、「一人語り」という分類による困難度には有意な差は認められなかったが、識別力には有意な差が認められた。この識別力の差は、8ターン以上の会話形式の場合と一人語り形式の場合との間に有意であることが認められ、これらの談話の型による違いにおいて、日本語学習者の聴解活動に何らかの差があるということがわかった。

日本語能力試験の聴解問題は、長年の結果分析を経て改良が重ねられてきた試験であり、上記表3、表4のとおり、困難度、識別力ともに適切な問題の範囲内となっている。しかし、今回の結果のように、談話の型や談話の長さによって、困難度に差が認められることがなかった一方で、8ターン以上の会話形式の場合と一人語り形式の場合という談話の型によって、識別力に差が認められた。

また、談話の長さと言話の型ということでは、2～5ターンか、6～7ターンか、8ターン以上かといった談話の長さによる聴解の違いはなかったが、8ターン以上の会話形式の場合か一人語り形式の場合かといった談話の型による聴解の違いがあるという結果であった。

これらからすると、談話の長さよりも談話の型の方が聴解活動に、より大きく影響し得るということであり、特に、8ターン以上の会話形式と一人語り形式の間には、聴解活動における何らかの差があると考えられる。

今後、聴解能力を伸ばす教室活動を行なう際のポイントとして、以下のことを考慮しながら、さらに考えていきたい。

今後考慮する点としてはまず、一人語り形式の場合の内容についてである。級ごとの一人語り形式の場合における聴解問題の内容を詳細に見てみると、特に4級では以下(10)のような文の羅列と思われる場合が見られる。

- (10) わたしの家族は、5人です。両親と、兄が2人います。兄は、2人とも、銀行で働いています。(2004年4級問題I 5番)

このような一人語り形式の場合は、1級などで見られる以下(11)のような段落とは異なると考える。さらなる詳細を見ていく必要があるだろう。

- (11) 現在、東京を中心に降り続けている雨ですが、今夜10時を過ぎたころいったん、上がるでしょう。ただ、関東地方に近づいている低気圧が、勢力を増していますので、夜明け前から再び強い雨になるおそれがあります。明日、お出かけの際には、十分ご注意ください。

(2001年1級問題II 9番)

次に、先行研究でも論じられているように、日本語能力試験では解答の選択肢が文字や絵で示されている場合と、音声のみで示されている場合があり、これらの違いが聴解に与える影響を考慮しなければならないだろう。このような解答の選択肢が異なる場合における、聴解問題の型が8ターン以上の会話形式の場合か、一人語り形式の場合かということによる聴解の違いについて、さらなる調査が必要だろう。

注

- 1) 本稿で使用する1ターンは、ある一人の話者が話し始めてから、他の話者が発話を受け継ぐまでの全ての発話とした。

《参考文献》

- 阿久津智 (1998) 「日本語能力試験1級聴解問題の談話型」『拓殖大学日本語紀要』8
- 小森和子・三國純子・近藤安月子 (2004) 「文章理解を促進する語彙知識の量的側面—既知語率の閾値探索の試み—」『日本語教育』120
- 島田めぐみ (2003) 「日本語聴解テストにおける選択肢提示形式の影響」『日本語教育』119
- 島田めぐみ (2006) 「日本語聴解テストにおいて難易度に影響を与える要因」『日本語教育』129
- 三國純子・小森和子・近藤安月子 (2005) 「聴解における語彙知識の量的側面が内容理解に及ぼす影響—読解との比較から—」『日本語教育』125

- 宮城幸枝 (2006) 「日本語能力試験 (聴解) の項目分析から見えるもの—2001年度、2002年度日本語能力試験1級聴解問題の分析を通して—」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会編『日本語の教育から研究へ』くろしお出版
- 山本富美子 (1994) 「上級聴解力を支える下位知識の分析—その階層化構造について—」『日本語教育』82

《使用データ・用例出典》

- 日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員会 (監修) (2002)
『平成12年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』
- 日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員会 (監修) (2003)
『平成13年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』
- 日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員会 (監修) (2004)
『平成14年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』
- 日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員会 (監修) (2005)
『平成15年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』
- 日本語能力試験実施委員会・日本語能力試験企画小委員会 (監修) (2006)
『平成16年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書』

[付記] 第68回第2言語習得研究会関東地区 (於: お茶の水女子大学) における研究発表の折に、多くの有益なコメントを頂戴いたしましたことを、記して感謝申し上げます。

(みずかみ ゆみ・平成十九年度本学大学院博士後期課程単位取得満期退学・中国帰国者定着促進センター常勤日本語講師)